スウィートビターバレンタイン

叶愛夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スウィートビターバレンタイン

【Ｎコード】
Ｎ５３６３Ｂ

【作者名】
叶愛夢

【あらすじ】
早乙女可憐は女の子らしい可愛い名前とは正反対の何でもハキハキ言っちゃう気の強い女の子！例え、相手がどんなに厳つい男の子だってなんのその！間違ってたらタンカ切っては必ず勝ちを手にする姐御肌。なのに、好きな人の前では恥ずかしがり屋の女の子に急変！？そんな恋に不器用な女の子のちょっぴりビターで、ほんのりスウィートな恋のお話し…

前編

吐く息白く染まる…如月。

街路樹はすっかり肌寒い姿になって一昨日降った雪を被りながら街行く人を見送っていた。

冬がやってきてあたしは気付く。

自分の住んでいる街はこんなに静かで寂しいんだってっっっっ――！！！

突然、背後から雪が頭に当たる。

ベシャと音を立てて後頭部辺りで潰れる。

ニット帽してたからよかったもののかなりびっくりした。

「おーい！可憐（かれん）平気か？」

「……」

背後からザクザクと雪を踏みながらあたしに近寄る犯人はあの馬鹿しかいない。

その馬鹿はうなだれるあたしの頭をペチペチ叩きながら雪を払い、ニカッと笑う。

「ワリィワリィ。雪玉作って投げたらたまたま前を突っ立てるお前に当たっちゃたよ。けど、まぁー可憐お前も通学路のど真ん中に阿呆みたく立っているのがぁ悪いんだぞ！そうでもなくてもお前、デカっつっ――…」

「颯汰（そうた）ごめんなさいは？」

あたしはグイッと馬鹿の…もとい天草颯汰（あまくさそうた）の胸倉を握りしめて睨み

付ける。

こいつとは、小学校からの腐れ縁。

とても中三には思えない小柄で華奢な身体。

幼い見た目通り、やる事なす事も全て幼稚。

アホくさて嫌になる。てか疲れる。

「…言ったじゃん！今ワリィって…」生意気な事にその馬鹿は口答えをする。

立場解ってねぇーな、こいつ。

「うん、でもあたしは『ごめんなさい。』ってはっきりちゃんと言って貰いたいの。なぜなら、ワリィって軽い感じがしない？本当に反省してるの？ってあたしは思うし、感じる。だからちゃんと『ごめんなさい』って言い直してくれる？…それと…あんた次やったらどうなるか分かるわよね…？」

最後の辺りは声を低くしてその馬鹿に告げる。

「（…知るかよ…。ブース…。大体ワリィもごめんなさいもおんなじ意味だつぅーのっっ！！痛ぅ――…」

ボソッと小声でその馬鹿が呟いたのを聞き逃すワケなくあたしはグーでその馬鹿の頭を殴る。

『言って解らぬなら身体に刻め。』

あたしはこの言葉を糧に生きるわ。

「イタァ…何も殴る事ないだろう！」

頭を押さえながらキッとあたしを睨み返す。

「そうね。口で言って解る賢い人間ならね。けど、言っても解らない馬鹿は誰よ！」

「俺だよ！！」

腕を組んでその馬鹿の返事に適当にウンウンと相槌して返すあたし。

「って認めるなよ！」

あまりにサラっと言うから普通にスルーしちゃったよ！

――はぁーこんな馬鹿相手してる時間が惜しい。

「で、阿呆な颯汰くん。あたしにごめんなさいは？」

腰に手を当てその馬鹿をキッと睨み付ける

「あ、『阿呆の坂田』みたいな呼び方止めろよ！馬鹿みたいだろ！」

「みたいじゃなくて馬鹿そのものでしょう？」

あたしは腕を組み直しながら溜息混じりに返事をした。それが鼻についたのか、

「……うっせぇ！暴力女！ブゥース！」

余計反発してきた。

上履きが入っている袋で馬鹿の頭をひっぱたく。それも思いっきり。からっぽの頭はとても小気味よい音を立てる。スパァァァン！！！！と。

「…痛ぅ……――」

相当痛かったみたいで颯汰はしゃがんで頭を押さえていた。

「本当に馬鹿ねぇ？颯汰くん。」
呆れた口調と表情を作り、その馬鹿に目を向ける。

「…ごめんなさい…」

ようやく折れたその馬鹿に始めからそうすれば良いのにと思った。

「まぁ…よしとしましょう。」
あたしはくるりと前を向き直し足を動かす。
ザクザクと雪を踏み締める音が耳に届く。

「（チッ…何様だよ。ブスが。意気がってんじゃねー。大体、あんな暴力女のどこが
「可憐」だよ？名前負けしてんじゃん。ジャイアンって方がお似合いだっての……）」

どうやら、その馬鹿はあたしが背を向けた瞬間気が緩んだのかボソッと呟いた。動かしていた足をピタっと止めてくるっとその馬鹿の方に振り向くとカチっと目が合った。

気まずそうな表情を浮かべる馬鹿にニコッと笑顔を向ける。

すると、それに釣られたのかヘラッと頭悪そうな笑みが返ってきた。

ドガッッッ！！

あたしは気を緩めたその馬鹿に足蹴りをかます。

「…うっ…」

どうやら、マズい所に入ったらしくその場にしゃがみ込んで押さえていた。

———情けない。てかあたしの周りに良い男はいないわ！

周りに居る男は幼稚過ぎる！やはり男は年上に限る。絶対！

まぁーこんな馬鹿放って置いてさっさと学校行こう。

あたしはもう一度向き直し足を動かす。

「おはよう。早乙女に颯汰」

そんなあたしにチリンチリンと自転車のベルを鳴らして男性が一人声を掛けてきた。

冷たい北風にふわぁとたばこの匂いと爽やかなミントの香りが鼻をくすぐる。あたしには誰の香りか一発で解る。

だって……

「朝っぱらから元気だなぁー。」

からかうような口調であたし達に笑顔を向ける。

黒のロングコートを羽織って自転車に跨がる姿がなんとも所帯臭い。けど、親近感を感じる。チラッと灰色のスーツが見えた。

それだけなのに、心臓が弾けそう。

あたし、男の人のスーツ姿に弱いのかな?

さっきからドキドキが止まらないよ。

「っ…純先っっ生!…お…、…おっ…おはよ…ございい…ます…。」

いつもそう。

あたしはこの人の前だと上手く喋れない。顔は蒸発する程熱いし、赤い。

心臓は近所迷惑になるんじゃないかって思う程うるさいし、おしっこが洩れちゃう小さな子みたいにソワソワ落ち着きない。

でも、その理由は分かってる。――それは……

ベシャアっっ!!!!

豪快な音を立ててあたしの後頭部に雪がぶち当たる。

……暫くニット帽に付着しながらもパラパラと雪が落ちる。

「……」

沈黙…ってか絶句。

一瞬事態が把握出来なかったがすぐに理解出来た。

あの馬鹿だ。あの馬鹿しかいない。

ムカムカした物が腹の底から燃え上がってきた。

と同時によりによって大好きな先生の前で恥をかかされたという事で泣きたくなる。

――どうしよう。顔上げられないよ。俯いたまま硬直しているあた

しに先生の口が開く。

「早乙女平気か？」

そう笑いながらあたしの後頭部に付いた雪を叩いてくれた。

突然伸びてきた先生の手の感触に心臓が跳ねた。

顔から火が出そうなくらい熱くて…。

恥ずかしくて…

ドキドキが止まらない。

どうしよう…？この気持ちがバレたら…。

「いえ！…はい！すこぶる平気ですっっ！」

あまりの恥ずかしさに声が裏返る。てか、自分何言ってるんだろう

…。

「ぷっ…すこぶる平気って」

でも、そんなあたしに気に止める事なく先生は優しい笑顔を向ける。

先生のこの笑顔が好き。

少し困ったように眉を下げて目を細める、柔らかい笑顔。

あたしの心に温かい火が燈るの。

景色が優しく見えるの。どうやら、あたしの幸せはこの人の存在によって成り立っているみたい……。

先生の笑顔が見れたくらいであたしは世界一幸せな女の子になれちゃう。

単純だなぁ。あたし。

先生はペダルを踏んで

「まぁー颯汰もちょっかい出し過ぎんなよ」

そう告げて颯爽と行ってしまった。

先生が見えなくなったのを確認してからあたしはゆっくり振り向いた。

「…颯汰ぁ」

声を低くしてドスをきかせて馬鹿にガンを飛ばす。

一度ならまだしも二度、しかも先生の前で！

絶ッッッッ対ぶちのめす！

「…あんた、日本語理解出来ないワケ？」

声を低くして馬鹿の胸倉をグイっと掴む。

が…馬鹿の様子がおかしい。

「ふん。」

かなり不機嫌そうな表情を浮かべるからあたしは思わず、手の力を緩めた。

すると、颯汰は襟元を直しながらスタスタ歩きはじめた。

――ん?、何なんだよ?あいつ。調子狂うな…

けど、声を掛ける雰囲気じゃなかった。

ただ黙ったまま馬鹿の背中を見つめる事しかできなかった。

◇◇◇◇◇

「キャアー!このチョコ可愛い!」

HRが終わて数分間の休憩時間。あたしは友人の理香と雑誌を見ながらお菓子を摘んでいた。

真っ直ぐの黒髪を一つに結い上げ、赤いフレームの眼鏡を付けた理香。その風貌からだけで頭が良い風に映る。

つか実際に、頭良いけど。だからか、理香は色んな先生からに頼りにされてる。

あたしも眼鏡にしようかな?

そしたら、先生達に頼って貰える。
純先生と話す機会増えるし。
そんな不純な事を思いながら適当に相槌を打っていた。
「あ…いっかも。」
「でしょ！でしょ！」
「うん、眼鏡良いかも。」
脳内でシュミレーションした自分に都合良い妄想に一人にやけるあたしに冷ややかな視線が刺さる。
「……可憐、人の話し聞いてないでしょ？あたし今バレンタインチョコの話題を振ったんだけど。なのに、なんで眼鏡が出てくんのさ？」
「…イ、インテリ系もいっかなー…と思いまして…」
申し訳なさそうに呟くと、
「意味解んないし。」
サラっと一言で片付けられた。

そして、また雑誌に視線を戻す理香。

二月に入ったせいかどの雑誌もバレンタインの特集ばかり。色とりどりのラッピングを身に纏った甘くて可愛いお菓子達…

女の子の想いと勇気がたくさん詰っているお菓子…

けど、こーゆーの柄じゃないな…

女の子の女の子したのって…。

理香は（意外にも）はしゃぎながら雑誌を見てるけど。

「ねぇーこのチョコ可愛いよね？」

「んーそうだね。」

机の上にはコンビニで買ったお菓子の入ったビニール袋が横たわる。

あたしはそれを摘みながら適当に相槌を打つ。

「薄っ！！反応薄いよ！可憐！」

理香は視線を雑誌からあたしに移してキッと睨んできた。

睨まれてもな…
「んー可愛いとは思うよ。けどあんまり興味ないんだよね。バレンタインって…」
もぐもぐと口を動かしながらちょっと控えめに返す。

「第一チョコとか甘い物好きくないし…自分男だったらこーゆーの貰ってもあんまり嬉しく…ないんだよね…ぶっちゃけ…」

「そこが駄目！」いきなり駄目出しを食らってしまった。

「いい？世の中の男はチョコが好き嫌いでバレンタインを待ち望んじゃいないのよ！例え嫌いであったとしても二月十四日に貰えたチョコはかなりの価値があるんだからあんたが嬉しくなくてもたいていの男は喜ぶものよ。男のステータスが解る日でもあるからね。」

「ふーん」

理香は力説してくれたけどそんなに意気込むものかな？「…ふーん…ってさっきから反応薄いなぁ…ていうかあんた、サキイカ食い過ぎ！つかどーゆの買ってきたの？」

そう言って理香はあたしが持ってきたビニール袋を取り上げ、中を覗き込んだ。

「サキイカ…に柿ピーに…うわっスルメ！オヤジじゃん！可憐！」

理香はそう言って呆れ果てたような口調と表情であたしを見据える。

「親父だろうと鼻血だろうとなんでもいいよ。」

あたしはそうぶっきらぼうに答えてサキイカをしゃぶる。

「…うわぁ…寒っ」

「……。」

自分でも外したなと気付き黙々とサキイカを噛み締めた。

「けど、駄目よ！！そんなの！」

理香は机をバンと叩いて真剣な表情を浮かべる。

「いい？可憐、あんたは仮にも女なのよ！それがバレンタインに興味ないだのサキイカやスルメなんかを喜んで貪り食うようじゃ、女として干からびてるわ！」

――女として干からびてるって……

ただ、サキイカを食べてるだけでなんでそこまで言われるんだろう……？

そんな言葉が浮かんだが、サキイカと一緒に飲み干した。

「昨日だって一組の男子にタンカ切ったり…あんた少しは控えたら？せっかくそれなりに可愛いのに勿体ないよ。」

理香は机に頬杖をついて溜め息混じりにそう零した。

「だって、あれはあいつらが掃除を他の子に押し付けようとしてたから！間違ってる相手に間違いを指摘して何が悪いのよ？」

間違った事はしてないもんと付け足してぷいと顔を背けた。

「…可憐のその性格は直んないね。けど、バレンタイン興味ないってそんなんでいいの？」

理香の声のトーンが変わった事に気付き首を傾げる。

「佐藤先生。」不意に大好きな先生の名前を理香が口にするから顔が火が付いたように熱くなる。

「あの先生、意外と女子人気高いからねぇ～。」

理香のその言葉にピクッと耳が反応する。

目を丸くして顔を理香へと向ける。

「え？初耳…何だけど…純先生ってそんな女子受けする顔だっけ？」

「んー特別顔が良いわけじゃないんだけど、先生の数学（授業）解りやすいから数学嫌いの女子生徒の支持が高いワケさ。きっと数学嫌いの小娘がここぞとばかりに群がってくるよ。」

腕を組みながらうんうんと頷きながら呟く理香。

――小娘って…あんたも同じだよ？と突っ込みたかったけど、言葉が出てこない。

それより、純先生が女子に人気があるなんて知らなかった。

ぱっと見近寄りがたい雰囲気を醸し出す先生。

さらに中学教師には珍しいビシッとしたスーツ姿。それがその雰囲気を強調していた。

あたしも初めはそんな先生が怖かったのを覚えている。

けど、段差に躓いたて転んだ姿を見て一気に恐怖心が溶けた。

意外にドジで天然で可愛い性格をしてて……。

あたしは先生の意外性に惹かれ、気がついたら好きになっていた。

人を好きになるのに理由や根拠なんて要らない。

風邪を引くように気付いたら掛かっていた。

こんな感情生まれて初めて。
友達や親に対する『好き』とは違うの。これが恋っていうものなんだ。

一日でも先生の姿を見れた日は薔薇色なの。

逆に会えない日は地獄に落ちたようなどん底気分。

つくづく、あたしって単純。

けど、あたし以外にも先生の存在に一喜一憂してる娘がいるかと思うと一気に不安になる。

「第一中学最後のバレンタインだから最後に想いをってのもあるだろうし。どうする？誰かと付き合うって事になったら？」さらに大きく頷いて楽しそうに語る理香

「ぐっ！…ゲホッ…ゲホッ！…な、付き合うって教師と生徒だよ！

有り得ないし！」

あまりにふざけた事言うからサキイカが変な所に入っちゃったよ。

胸元を叩きながら反論すると

「卒業しちゃえばカンケーないじゃん。」

ってさらっと笑顔で言い切った。

「うっ…」

確かに卒業したらあたしはここの生徒じゃなくなる。

先生の教え子じゃなくなる…。そう、つまり先生と会えなくなる…

あたしの恋には時間がない。

三月になったら卒業してここを出なければいけない。

もう二月…。卒業まで一ヶ月を切った。

それは、先生と一緒に居られる時間でもある。

短すぎる…。もっと一緒に居たい…。

だって、あたしまだ何もしてない。

最近になって言葉を少し交わすようになっただけ…。

でも、そんなんじゃ想いは伝わんないよね……？そんなあたしに残された選択肢は二つ…

行動するか、諦めるか…。

行動したいけど、恥ずかしさが邪魔をする。

でも、この想いを飲み干して単なる綺麗な思い出にはしたくない。

ちゃんと伝えたい。

先生に。

この気持ち。

なら…

「でもまぁー…可憐がキョーミ無いんなら仕方ないよね？」

理香は素っ気ない口調で言い放ちあたしのサキイカを三本わしづかんで口へと運ぶ。そんな理香の手をガシッと握りしめ、

「やる！やってやろうじゃねぇーか！バレンタイン」

思わず、口走ってしまった…

「本当ー？やったぁー！！そうだよ！やっぱり最期なんだしぶち当たって成仏しなきゃ！」

理香は満面の笑みをあたしに向ける。

その表情はかなり楽しんでいる様子がひしひしと伝わってきた。

もしかしなくても…あたし嵌められた…？

てか、成仏ってなにさ！？
あたしは幽霊かい！

「…あ！…」

「ん？」

ふとある事に気付いた。
下らない事かもしれないけど、とても重要な事…

「可憐？どうした？」

理香は首を傾げてあたしの顔を覗き込む。

「ねぇ、…確か先生甘い物苦手だった気がする…」

そうだ。

この前職員室に行った時、他の先生がおまんじゅうを配っていた時に先生

『甘い物ダメなんで』って笑顔で断っていた。

そんな人にチョコあげれないよね…

「へぇーそうなんだ。ちょっと意外だね？」

サキイカ三本をくわえながら相槌を打つ理香。

「なんでそんな冷静なの？甘い物食べれないんなら、意味ないじゃん！」

「そう？だってそれなら、チョコとか甘いの止めればいいじゃん。例えば、スルメとかサキイカとかにしてさ」

「それは嫌！」

何が悲しくて好きな人に、スルメやサキイカをあげなきゃいけないの？

確実に変な女だと思われるじゃん！

「でも可憐らしいと思うよ」

ニコッとイタズラな笑みを向けて理香は言う。

「…それって…遠回しに変な女だって言ってない？」
実に楽しそうな表情を浮かべる理香を軽く睨みつける。
「そんな事言ってないって！大体、可憐が変なのは言わなくてもみんな知ってるから」
ニコッと愛らしく笑みを返す理香。

っ…オイ！！

言い返したかったけど、そんな気力もなくハァーと溜め息を吐く。

けど、何あげよう…？やっぱり、マフラーとか手袋辺りが無難だとは思うけど、お小遣三千円のあたしにはキツイな…
つか、そんなのあげて先生受け取ってくれるかな…？
「別にそんな難しく考えなくてもいいじゃん。甘いのが苦手なら甘さ控えめのお菓子にするとか。」
うーん、うーんと唸りながら考えるあたしに理香が口を開く。
「逆に『純先生、甘いの苦手って聞いたんで純先生の為に甘さ控えめのチョコ作ったんです。お菓子作りした事ないから見た目悪いけ

ど、先生の事想って一生懸命作ったんですハート。』って言えばたいていの男は落ちるはず…」

そう楽しげに笑う理香。

さらに『上目遣いがポイントね。』って付け足して。

――絶対、こいつ楽しんでる。つか、最後の辺り声のトーンが一オクターブ下がってるのが気になるんですけど…。

でも、敢えて触れないでおこう。

「うーん、甘さ控えめのお菓子か…って、手づくり！」

びっくりして声が裏返っちゃった。声、大きかったせいかチラチラ何人かこっち見てくるし…。

「うん、それがどうかした？」

理香は至って、平然とした表情でサキイカを口の中にほおり込む。

「どうかした？じゃないよ！あたし料理一切ダメだよ！」

周りの目を気にしながら、声を潜めて理香に告げる。

「料理って…あんたお菓子作りだよ？」
あたしの発言に理香は表情を曇らせた。
『一応女でしょ』って苦笑いしながら。

「お菓子作りだろうと料理は料理！あたし料理一切ダメなの！あんな恐ろしい物ぜぇぇったい無理！」

「は？…恐ろしいって…？」
必死で語るあたしを見ていた理香の表情がどんどん曇っていく。
心底、理解出来ないのかどういう事？って首を傾げて問いただしてくる。

「恐ろしいじゃん！だって包丁や火を使うんだよ！一歩間違えれば死んじゃうだよ。恐くて恐くてたまんねぇーよ！」
そう…あたしは火や包丁が苦手…
あの研ぎ澄ました切っ先…持つ以前に見るだけで身震いしてくるよ。
火に至ってはガスコンロはもちろん、マッチも恐くてつけれない始末…

「…人としてそれどうよ？」冷ややか…ていうか哀れむような眼差しを向けてくる理香にハッとする。

「う、うるさいなー！良いじゃない！人間誰だって得手不得手があったって！」

ぷいと顔を背けると、理香は頭を下げ肩を小刻みに震わせていた。

あたしはその姿に眉を潜めた。

顔を覗き込んでみるとクスクスと笑い声が漏れてきた。

「料理苦手だなんて可憐らしいというか何と言うか。」

目に涙まで浮かばせて馬鹿笑いする理香にちょっぴりムッと感じた。

「どーせ名前負けしてますよーだ」

『可憐』だなんて女の子らしい名前とは裏腹にあたし自身女の子らしい事一切駄目だもん。

自分でも判ってる。この名前あってない事くらい。

半ばヤケになりながら口を開くと予想しなかった言葉が返って来た。

「違う。違う。馬鹿にしたつもりはないよ。可愛いなーって思って」

理香は顔を上げて笑いながらゴメン。ゴメン。って言いながら涙を拭っていた。可愛いって言われ慣れない言葉に耳が熱くなる。

が、すぐに打ち消された。

「１６８センチの巨漢で凶暴女と名高い早乙女可憐にも苦手…っていうか怖い物がある事にあぁ普通の女の子なんだなーと思えてさ。」

「……」

この、アマどこが馬鹿にしてないだ？ぶちのめしたろか？

にこやかな笑顔を浮かべる理香にほのかな殺意を感じた。

「けど、これを機に克服したら？火と包丁。」

きっと理香は何気なく言った台詞だと思うがあたしは断固として拒む。

「無理」

きっぱり言い切るあたしに理香は眉を潜めながら反論する。

「ちょっと！…ふーん、可憐って結局その程度の女なんだ？」

「は？」

「火や包丁が怖いって理由だけで一度やると決めた事を取り消しちゃういい加減な女だったんたなんてがっかりだよ。」

はぁーと深い溜め息を吐く理香の姿にムカッと来た。悪いけど、あたしそこら辺にいるチャラチャラした女じゃないんだから！

「ど、どういう意味よ！」

呆れ果てたという表情を浮かべる理香にますますムカッとくる。

「別にー」

そう言って理香はぷいとそっぽを向いてしまった。

「…ちょっと、誰もやらないとは言ってないじゃない！」

「だって無理なんでしょ？いいよ。別に。」

「ちょっとあたしをなめないで。」

「この早乙女可憐一度やるって言った事は必ずやるわよ！」

まさに売り言葉に買い言葉って奴…

勢いだけで言ってしまったあたしは我に返ってハッとした。

目の前にはしてやったり。という勝ち誇ったような表情でほくそ笑む理香の姿があった。

「……」

早乙女可憐。１５歳。

友人に嵌められて初のチョコ作り決定。

後編

結局、理香の戦略にまんまとハマったあたしは学校が終わって理香と繁華街に繰り出した。

やはり今1番旬なイベント。どの店もバレンタインフェアとかで可愛い系のチョコやらちょっと気取った大人向けのチョコなどが店先に並んでいる。

やたら『手作り』にこだわる理香の意見でとりあえず製菓コーナーに向かった。
意外にも結構人が居た。同じような制服姿の子や会社帰りのお姉さん。知らなかったけど、手作りする人って結構居るんだ。

「ク、クーベルチュールチョコって何？」
板チョコを一枚手に取っては理香に問い掛ける。
だって、あたしが知ってるチョコとは少し違うんだもん。

少し厚みがあって甘さが表示されていた。つか包装紙が英語って時点で高そう…
「んー？クーベルチュールチョコってのは製菓用のチョコの事だよ。」
「製菓用？何が違うの。」初耳！
チョコって手作り用とそうじゃないのがあるなんて！
「んー市販のでも別に良いとは思うけどそういうのってミルクとか香料が入ってるからお菓子作りにはあんま向いてないんだよ。」
あたしの目を見ながら丁寧に教えてくれる理香。
そんな理香にあたしは目を丸くする。
だって、意外なんだもん理香がお菓子作りに詳しい事に。
いいなぁ…勉強も出来て、可愛いくて女の子らしい特技もあって…。
あたしなんて特技らしい特技一つもないもん。
「で？どうする？」
理香の声でハッとする。

「え？どうするって？」

「買うの？買わないの？」

そう問い掛けられ、あたしは持っていたチョコに目を落とす。

値段は、三百円と板チョコにしては割高。

けど……

渡した時の先生の表情が頭をよぎる。

どんな顔するかな？喜んでもらえるかな？驚くかな？

あたしの大好きなあの笑顔を見せてくれるかな？

それが見れるなら三百円って安いよね？

自問自答した結果あたしが下した答えは、もちろん。

「買う。」

◇◇◇◇◇

理香の薦めでトリュフを一緒に作った。

キッチンは散らかり放題。慣れぬエプロン姿に三角巾。手はチョコまみれでベタベタ。

なのに、そんな自分がくすぐったい。湯煎に掛けたチョコは吸い込まれそうな程綺麗で艶やだった。

甘い甘い香りが胸いっぱいに広がる。

溶け合うチョコにあたしの想いを込める。

どうか、喜んでくれますように…

あたしの想いが伝わります様に…

祈りに似た想い。

初めて作ったトリュフは案の定、いびつな形でまるで今のあたしみたいだった。

でも、理香は

「美味しいよ」

って笑ってくれた。

あたしも食べるべきなのだろうが、もともと甘いの好きじゃなかったし香りだけでお腹いっぱいになったから遠慮した。

作ったチョコで一番形の良い物を選んでは先生が好みそうなシンプルなデザインのラッピングを施した。

明日、学校に行くの緊張する。

バレンタイン前日の女の子ってみんなこんな気持ちなのかな？

ハラハラ、ドキドキ、ソワソワ。ワクワク。

心臓がうるさいの、感じながら眠りにつくのかな？「ふぅー…」とうとうやってきてしまったバレンタイン！

緊張のせいか足取りが重い。

正門の前で一人佇む。

昨日、理香と作ったチョコは紙袋に入れてある。

誰かに気付かれたら恥ずかしいなぁ…

ていうか、先生にいつ渡そう？

そもそもどうやって渡そう？

やっぱ手渡し？

恥ずかしい……

「おはようー可憐！」

そんなあたしに理香が元気良く話し掛ける。

「お、おはよう」

理香に会えて幾分ホッとする。

笑顔で挨拶を返す。

目が合ってはニヤニヤする理香に気恥ずかしさを覚える。

「いつ渡すの？」

「……」

からかい半分に聞いてくる理香が正直うざい。

黙りこくれば、ねぇねぇ。って袖を引っ張りながら顔を覗き込んでくる。

「もー！！！」

うるさいなぁー！と言おうとしたあたしの後頭部にまた雪玉がぶち当たる。

ベシャッッッッ！！

「……」パラパラと雪が落ちるのを感じながら佇む。

つ、冷たい……

てか、こんな事するはあの馬鹿しかいない。

キッと眉を吊り上げて振り向けば推測していた人物がいる。

「ちょっと颯太ぁ！あんた――
「邪魔…」
声を低くして馬鹿を睨んだいつもなら頭悪そうな笑顔でからかってくるはずなのに、今日は違う反応が返ってきた。
睨むようにあたしをチラ見してはスッと横切る。
「……」誰が見ても機嫌悪いって解る。
けど、理由は分かんない。
「颯太も可哀相……」
ポツリ理香がそう呟いた。
何が？って尋ねると何でもない。と笑ってごまかされた。
腑に落ちなかったけど、考えるのが面倒になり、まぁいっかと納得してあたし達も教室に向かった。
教室に着いて暫く雑談していたら、ＨＲ開始のチャイムが鳴り響く。

先生はいつもそのチャイムぴったりに教室にやってくる。
なのに、今日は3分過ぎても来ない。

なかなか来ないせいか少しざわつきだす。
とその時、教室の戸が開く。
純先生の姿が目に映るだけで安心する。
ようで気恥ずかしい。

教壇に立って全体に遅れてゴメンと軽く頭を下げる。
なんか、先生今日機嫌良さそう。
いつもより表情が柔らかい。
良い事あったのかな？
それに気付いたのはあたしだけじゃなかった。

「先生ー！なんか良い事でもあったのー？」

「え？いやーまぁー…」

その問い掛けに先生は気恥ずかしそうに笑いながら答えた。

「……え……？」

先生のその言葉に全てが止まった気がした。

――ケッコンスルンダ…。

あたしの心の中で何かが、ガラスの様に砕け散った。

そして、粉々になったその破片はあたしの胸に深く突き刺さる。

ズキズキしてすごく痛い。また鼻の奥がツーンとしてきて、目頭は熱く、息苦しい。

なのに、他の生徒(みんな)は笑顔で先生に拍手しながらおめでとうって言ったり指笛鳴らしたりしている。

――なんで喜べるの？

――どうして、祝福ができるの？

――あたしはなんで喜べないの？

――大好きな人の幸せなのに…

「っ…」

「早乙女？どうした？」

ふと先生に呼び掛けられる。その発言にみんなの視線があたしに向けられる。

堪え切れなかった。

ポロポロと瞳から零れる雫

情けない。

人前で絶対泣かないって決めていたのに。

でも、堪え切れなかった。

教室内は一気にざわつく。

「早乙女？」

心配そうな声色であたしを見つめる先生。

笑わなきゃ…。

笑っておめでとうって言わなきゃ……。

なのに、声が言葉が出てこない。

笑い方が分からない。静かに立ち上がって俯きながら言葉を紡ぐ。

みんなの視線を感じながら……。

「……すみません、お腹痛くて…」

ウソ。痛いのはお腹なんかじゃない。

「大丈夫か？保健室に行くか？えーっと保健委員は――」

「…一人で平気です」

そう吐き捨て俯いて教室を後にする。

教室を出て少し歩いた。

階段を上って踊り場に着いた所でもう歩けなくなった。

景色が涙で滲んで視界が見えなくなる。

あたしは崩れる様にその場で泣き出してしまった。

実らないのは分かっていた。

だって、相手は先生であたしは生徒。はなから眼中に映っていないのも分かっていた。

けど、こんな形で終わりたくなかった。

せめて、卒業式までは先生の事想っていたかった。

ううん、今日（バレンタインの日）だけでもよかった。何も考えず先生の事想ってチョコ渡したかった。――けど、もう諦めなきゃいけない。

昨日作ったチョコが無駄で無価値な物へと変わる…。
授業開始のチャイムが鳴り響く。
それが今のあたしにとってとても遠いものに感じた。
「…可憐……」
突然、声を掛けられ身が強張る。
膝を抱えていたから相手の顔が分からないけど、声で分かった。
「……何よ？颯太、何しに来たのよ？」
口調がきつくなる。
颯太は何も悪くないのに八つ当たりしてしまう。
「……」

けど、颯太からは何も返ってこない。それがさらに腹立たしくて酷い言葉が出てしまう。

「用が無いんならあっち行ってよ！！」

涙混じりに叫んでしまう。

「可憐……」

そんなあたしとは裏腹に優しい声色で呼び掛ける。

「馬鹿にしに来たの？そうでしょ？あたしが柄にもなくチョコ作ったりした事に――」

「可憐！」

颯太はさっきより声を大きくして肩を掴んで来た。

肩を強く掴むからあたしは反射的に顔を上げる。

颯太と目が合う。

いつもヘラヘラ笑ってる颯太とは違って真剣な眼差しであたしを見つめる。

「俺にチョコをくれ！」

――はぁ？

「な、何言ってんの？」
思わず、声が裏返る。
やっぱり馬鹿にしてるの？
それに、チョコくれって…先生の為に作ったチョコしかないし。
「今すぐじゃなくていい。」
「つか、あいつの為に作ったチョコなんか要らない。」
そう語る颯太の顔が茹蛸みたいに真っ赤で恥ずかしそうで…
それに、あたしまで釣られ顔が熱くなる。

「三年。三年後のこの日にチョコをくれ。俺それまで背伸ばすから。お前を追い越すから。お前に釣り合う男になるから。だから――」
指を三本立ててそう話す颯太。顔は真っ赤で恥ずかしそうに顔を逸らす。
そんな颯太の様子にさっきの痛みが少し和らぐ。

「馬鹿…。普通バレンタインチョコってねだるもんじゃないと思うけど？」

あたしは笑って言葉を返す。

それに応えるかの様に颯太も歯を見せる。

ニカッて太陽みたいな笑顔。

ありがとう…颯太。

心配して来てくれて……

不器用ながら励ましてくれて……

素直じゃないあたしは心な中で呟く。

初めての恋はビターチョコみたくほろ苦かった。

だけど、次に出会う恋はミルクチョコみたく甘く優しい物でありま
す様に……

そんな事を一人静かに祈った。

愛を司るこのバレンタインという日に……。

ｆｉｎｅ

後編（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます（＾＾）短編の予定がダラダラと長くなってしまい読むのしんどかったと思います。なのに後半はストーリーが駆け足気味だったりと作者的にも駄文だなぁと感じる作品です。けど、投稿したかった。（笑）この作品は高校生時代の自分がモデルです。先生に恋してはしゃいで泣いたあの頃の私。その時の気持ちをやっと文章にして書き上げる事ができ、私的にようやく踏ん切りができたと思います。唯一の心残りはバレンタインデーにアップ出来なかった事です（Ｔ－Ｔ）最後になりますがここまで読んで下さりありがとうございま

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5363b/

スウィートビターバレンタイン

2010年10月11日12時13分発行